

親鸞聖人を紐解く 関東編①
「門徒集団“二十四輩”の展開」

5

西河 唯

1、『御伝鈔』上下十五段

上巻（八段）		下巻（七段）	
10	第一幅	①師資遷謫	第三幅
		② <small>いなだこうぼう</small> 稲田興法	
		③ <small>へんげんさいつ</small> 弁円濟度	
		④箱根靈告	第四幅
15	第二幅	⑤熊野靈告	
		⑥洛陽遷化	
		⑦廟堂創立	
		⑧入西鑑察	

【親鸞の在地伝承】 承元の法難を機縁に、親鸞の教えが都から地方へと伝播していく。第三幅ではとくに初期真宗の拠点となった関東での出来事が描かれる。近世以降、全国各
20 地で、その土地ゆかりの親鸞伝が形成され、広く民衆に浸透していった。板敷山（現 茨城県石岡市）の「弁円濟度」はその代表的な物語で、法螺貝や弓矢など、弁円ゆかりの遺品が伝えられるとともに、今もかの地の人々の間に語り継がれている。

2、『御伝鈔』下 第二段「稲田興法」

25



聖人（親鸞）越後国より常陸国に越えて、笠間郡稲田郷といふところに隠居したまふ。幽棲を占むといへども道俗あとをたづね、蓬戸を閉づといへども貴賤ちまたにあふる。仏法弘通の本懐ここに成就し、衆生利益の宿念たちまちに満足す。この時聖人仰せられてのたまはく、「救世菩薩の告命を受けしいにしへの夢、すでにいま符合せり」と。

30

（註 1054）

【要旨】 越後国で五年間の刑期を終えた親鸞は、関東に移って常陸国笠間の稲田に隠居したア。親鸞の庵には、聖人滞在の噂を聞いた人々が駆けつけて繁盛をみせたイ。

【**稲田**】 茨城県笠間市稲田。親鸞聖人の関東における布教活動の拠点であった地。西念寺の所在地。『御伝鈔』下巻 2 段に「聖人越後国より常陸国に越えて、笠間郡稲田郷といふところに隠居したまふ」（註 1054）とある。古代から開けた土地であったとみられ、親鸞聖人在住当時は、蓮生（宇都宮頼綱）の勢力圏下にあった。

5

【**西念寺**】 浄土真宗の寺院。茨城県笠間市稲田。稲田禅坊・稲田御坊ともいう。関東在住の頃の親鸞聖人の旧跡。健保 2 年（1214）、越後国（現在の新潟県）から妻子とともに常陸に移住した親鸞聖人が、関東での活動の拠点とした草庵に始まる。稲田の城主である稲田九郎頼重がこの地に親鸞聖人を招いて教化を受け、親鸞聖人の帰洛後、草庵跡にこの寺を建立したという。なお、「化身土巻」に「元仁元年」（註 417）という記述が見られ、この地で『教行信証』の執筆が進められたといわれる。

『教行信証』『化身土巻』

三時の教を案ずれば、如来般涅槃の時代を勘ふるに、周の第五の主、穆王五十三年壬申に当れり。その壬申よりわが元仁元年 [元仁とは後堀河院、諱茂仁の聖代なり] 甲申に至るまで、二千一百七十三歳なり。（註 417）

正法・像法・末法の三つの時代が説かれた教えについて考えると、釈尊の入滅された年代は、周の第五代穆王の五十三年にあたっている。その年から我が国の元仁元年に至るまで二千百七十三年を経ている。（現 537）

20

【**蓮生（1172～1259）**】 実信房蓮生のこと。俗名は宇都宮弥三郎頼綱。下野国（現在の栃木県）の有力武士で、鎌倉幕府の御家人であったが、元久 2 年（1205）に謀反の疑いをかけられて出家した。法然、のちには証空のもとで学び、嘉禄の法難の際には、法然の遺体を比叡山の衆徒から守って嵯峨に移した。親鸞が関東で最も長く過ごしたと考えられている常陸国稲田（現在の茨城県笠間市稲田）周辺は当時、頼綱の勢力圏であったと考えられている。なお、「れんせい」と読む場合は、法力房蓮生（熊谷直実）」を指す。

3、『御伝鈔』下 第三段「弁円濟度」



聖人（親鸞）常陸国にして専修念仏の義をひろめたまふに、おほよそ疑謗の輩は少なく、信順の族はおほし。しかるに一人の僧 [山臥と云々] ありて、ややもすれば仏法に怨をなしつつ、結句害心をさしはさみて、聖人をよりよりうかがひたてまつる。聖人板敷山といふ深山をつねに往反したまひけるに、かの山にして度々あひまつといへども、さらにその節をとげず。つらつらことの参差を案ずるに、すこぶる奇特のおもひあり。よつて聖人に謁せんとおもふころつきて、禅室にゆきて尋ねまうすに、

30

上人左右なく出であひたまひけり。すなはち尊顔にむかひたてまつるに、害心たちまちに消滅して、あまつさへ後悔の涙禁じがたし。ややしばらくありて、ありのままに日ごろの宿鬱を述すといへども、聖人またおどろける色なし。たちどころに弓箭をきり、刀杖をすて、頭巾をとり、柿の衣をあらためて、仏教に帰しつつ、つひに素懐をとげき。不思議なりしことなり。すなはち明法房これなり。上人（親鸞）これをつけたまひき。（註 1055）

【要旨】 親鸞の教えは広く関東に広まったが、それを快く思わない者も多くいた。そのひとり「弁円」という山伏は、板敷山の山中に隠れて親鸞を害そうとした。ところが親鸞は一向に現れない。ついに弁円は庵に押しかけ、親鸞を直接手に掛けて害そうとした[㊦]。ところが親鸞は逃げる様子もなく、実に気軽ないでたちで弁円の前に現れた。弁円は親鸞の顔を見るとたちまちに害心が失せ、涙を流して懺悔し、その場で山伏のシンボルである頭襟を取り、弓箭を折って親鸞に帰依することを決意した。親鸞は彼を許し「明法房」という法名を授け弟子とした[㊧]。

【明法房（～1251）】 親鸞の門弟。二十四輩の第十九。「交名牒」によると常陸国（現在の茨城県）北郡の住。『御伝鈔』下巻3段（註1054）によると、もと山臥（山伏）で、念仏布教を憎み親鸞を殺害しようと板敷山中で待ち伏せしたが失敗し、親鸞の稲田草庵を襲ったところ、かえってその門弟になったという。『御消息』第4通（註742）などには、明法房の往生について感慨が記されており、親鸞に先立って没したことが知られる。常陸国久慈西郡塔之尾（現在の茨城県常陸大宮市）は明法の旧跡と伝えられ、上宮寺（茨城県那珂市）、法専寺（茨城県常陸大宮市）の開基とされる。なお、弁円と通称されるが、これは近世以降の伝承によるものようである。

『御消息』四

なにごとよりも明法御房の往生の本意とげておはしまし候ふこそ、常陸国うちの、これにころざしおはしますひとびとの御ために、めでたきことにて候へ。（註742）
何よりも明法房が往生の本意を遂げられたことは、常陸の国の往生を願っておられる人々にとって、よろこばしいことです。（現15）

4、関東における親鸞の事跡

【三部経千部読誦の中止】 親鸞が常陸国に向かう途中、「佐貫（上野国、現在の群馬県邑楽郡明和町）」という地に立ち寄る（流罪赦免後3年、42歳頃）。親鸞はこの佐貫において浄土三部経を千部（千回）読もうと思いつく。その目的は『恵信尼消息』に「すざう（衆生）利益のためにとて、よみはじめてありし」（註816）とある。結局、親鸞は読み始めて4、5日で読誦を中止し、みづから信じ、人を教へて信ぜしむること、まことの仏恩を報ひたてまつるものと信じながら、名号のほかにはなにごとの不足にて、かならず経をよまんとするやと思ひかへして、よまざりしことの、さればなほもすこし残るところのありけるや。（註816）

自ら信じ、そして人に教えて信じさせることが、まことに仏の恩に報いることになると思っていながら、名号を称えることの他に何の不足があって、わざわざ経典を読もうとしたのかと、思い直して読むのをやめました。今でも少しそのような思いが残っていたのでしょうか。(現 131) と思い返し、専修念仏の教えに立ち返っている。

5

【信濃の善光寺】 親鸞の流罪先の越後国府から上野国に至る道程を考えると、国府から信濃国（長野県）に至る道が、古来より人や物の流通として使われていた。このルート上には、飛鳥時代の創建、百済から渡来した「善光寺一光三尊仏」という形式を有する阿弥陀三尊像を安置する善光寺がある。親鸞は『正像末和讃』の最後に「善光寺讃」を制作し、善光寺の阿弥陀如来を尊崇している。また、善光寺本堂外陣には「親鸞松」という大きな一本松が生けられ、真宗高田派本山の専修寺にも、善光寺様式の一光三尊仏が安置されている。確かな記録はないが、越後国から上野国へ行くまでに、親鸞が善光寺に参拝していたのではないかとする説もある。

15 **【『教行信証』の撰述】** 『教行信証』撰述がいつのことか、いろいろな議論がなされてきたが、先に示した通り親鸞は「化身土巻」において、釈尊が入滅してから末法の世に入った年代を計算している。そこには「わが元仁元年」とあり、元仁元年（1224）を基準として末法の年代を逆算していることから、この年が『教行信証』撰述の基準とされている。また、この年は法然の十三回忌に該当していることも重要である。以上のことから、元仁
20 元年（親鸞 52 歳）こそ、浄土真宗の根本聖典をまとめるに際し、親鸞の思想が円熟した年と位置付けられ、浄土真宗「立教開宗」の年とされている（ちなみに 2023 年は親鸞生誕 850 年、立教開宗 800 年にあたる）。しかし、親鸞真筆の『教行信証』坂東本には 80 歳代の筆跡や、多くの書き直しなどが含まれており、晩年まで推敲を重ねていたことが知られている。

25

【寛喜の内省】 寛喜 3 年（1231）、59 歳の頃、風邪を引いた親鸞は、高熱にうなされる中で「まあそのようなものでありましよう」と呟く。これを聞いた恵信尼がうわごとかと尋ねると、「病床に伏してから何気なく目を閉じていると、お経の文字がはっきりと目に浮かぶ。念仏をよるこぶ信心のほかにも、どのようなことが自分の心のなかにあるのかと、よくよく考えてみると、17、8 年前のことを思い出した」という。これは三部経千部読誦のことを指す。こうした読誦の行に対して、未だ自身の心に執着の思いが残っていたことに気づき、反省したのである。

【参考文献】

- 35 『浄土真宗辞典 註釈版（第二版）』（本願寺出版社、2004）
『浄土真宗辞典』（本願寺出版社、2013）
龍谷ミュージアム編『釈尊と親鸞 インドから日本への軌跡』（法蔵館、2011）
平松令三『親鸞（歴史文化ライブラリー）』（吉川弘文館、1998）
岡村喜史『日本史のなかの親鸞聖人 歴史と信仰のはざままで』（本願寺出版社、2018）